

## 儂き魂

このままもう一度寝台に戻ってシーツを被り一週間ぐらい休みたくなってきた。

目を疑った。いつものように愛用のピアスをつけようとしたら宝石箱の中になかった。確かに昨日寝る前にここに置いたのに。と、手に紙があたる。不安なままそれを取り出したら一通の手紙。嫌な予感。こんな手紙などおいた記憶は全くないのだがと眉をひそめ裏返すと。

『B』

とだけある。

「……」

朝も早くから冗談はほどほどにしてくれ、今日も予定はたくさん詰まっているのだ。意外すぎてもはやまともに頭も動かない。

とりあえず『B』の文字だけを見ているも仕方がないので封を切った。中身も簡潔で、「返して欲しくは王太女殿下に会わせろ」。

「いや、本気で冗談はやめてくれ……」

そういうわけにもいかないのでピアスはせず早朝会議に顔を出した。議題はいつものように進むのだがどうにも落ち着かない。ふと気付くと耳に手を触れている自分。自覚していなかった自分の癖に少し笑う。

会議自体はとくに大きな事もなく終わりクローゼの元へ向かう。少し眠そうにあくびをこつそりしていたがユリアの姿を見つけて慌てて口を閉じるのが見えた。

「おはようございます、殿下」

「おはようございますユリアさん」

さわやかに微笑んでいるのであくびの事は指摘するのを止めた。

「あれ……ユリアさん、なんだかいつもと違うような……？」  
不思議そうな顔をして覗き込んでくる。ユリアが口を開きかけた時手がちゃんと合わされた。

「あ、ピアス。どうしたんですか？ 今日はずけてないですか」

「ああ……いろいろありましてちょっと置いて来ました」

「そうなんですか。ちょっとだけ不思議な気分ですね」

「どうもあれに無意識に触れる癖があったようです。今朝の会議中何度妙な動きをしたことが」

肩を疎めてユリアは微笑んだ。

「ああくローディア様、こちらにいらっしやいましたか」

やや小走りになってヒルダが執務室に入ってきた。ユリアの姿を見て一瞬間困った表情をしたがクローゼに促され言葉を続ける。

「実は……陛下愛用の茶器がなくなってしまいました」

「陛下の？ 確か先々代の……」

「ええ。帝国から贈られた、かの国の最高窯で焼かれた磁器。

今では土自体が取れないからあれと同等のものを作る事が出来ない、稀少なものです」

ユリアと話して柔らかくなっていた空気が一気に緊張した。

「実はそれだけではなく、公爵閣下のカフスポタン、ルナー執事のグラスチェーン等、細々とした高価なものが……」

「なくなっているのですか？」

申し訳なさそうな顔でヒルダが頷いた。

「……とりあえず本人様方でお探しいただいています」

「わかりましたヒルダ夫人。こちらでも見張り、巡回を強化し犯人確保に努めます」

敬礼をしユリアは頷く。

「私もなくなつたものがないか確認してみますね」

真剣に王太女も首を縦に振るがヒルダが少し肩を震わせた。幸いクローゼは気付かなかったようだがユリアはなんとなく予想がついてしまった。なので、彼女が女王宮に戻った後、見張りにそつとより近くに立つことを命じるのだった。

「……ユリアさん、ちょっと」

「はあ……なんとなく理由はわかりますが、殿下の前では……」

「耳飾がないのはそういうことですか」

本館に戻りながらヒルダに問われ軽く頷いた。

「ではこちらに」

手招きされたヒルダの部屋、机の上に何枚かの手紙がある。自分が今朝方、冗談はやめてくれと言って宝石箱に戻しかけたものと同じだ。文面も同じだろうと思つて一つ手に取った

らやはり同じだった。

「返して欲しくば王太女殿下に会わせろ」

朝からこれ以上げんなりすることはないだろう。怪盗Bとブルブランのクローゼへの執着は少々の事では消えないらしい。

「あまり態度に出してしまうと聡明な殿下のこと、すぐに感

づかれてしまいそうですね」

ヒルダもどうしたものかど溜息。二人して黙っているとどこからかユリアを呼んでいる声が聞こえてきた。嫌な予感

がして顔を見合わせる。

「出て行かないわけには行きませぬよね」

「心中お察しします……」

ヒルダに見送られ覚悟を決めて部屋を出た。ユリアを呼ぶ兵は詰所からちようど出てきたところで、よかつたといながら寄ってくる。

「今度はどこで盗難だ？」

「は？ ああ、ええと……」

面食らった兵だがすぐに指折り数え始める。

「ちよつと待て！ 一体どれだけの箇所だというのだ！」

「共和国、帝国の両大使館、闘技場、高級ホテル、オーブメント工房等、総計三十二箇所で現在、盗難が発生したとの報告が入っております。その全てにこのようなカードが添えられておりました」

「さんっー」

「現在で、です……」

予想すらしていなかった数に思わず大声が出てしまった。申し訳なさそうに兵が付け足す。

「よくもまあ一晩でそれだけの窃盗を働けたものだ……」

決して褒められた事ではないがその努力はすさまじい。でさればもつと建設的な方向にそれを發揮してくれば皆の迷惑になる事はないだろうにとさえ思ってしまう。

「現在王都警備隊が各戸に周り被害確認を行っております」

「そうか……警備隊長を後で呼んでおいてくれ」

「諒解！」

威勢良く駆け出す兵。見送るユリアの表情は対照的に酷く疲れ果てていた。渡された手紙の束を執務机に放り投げて机につつぷする。ふと視界に入った手紙はどうかやら帝国大使館のものだった。添付されているメモを見るとどうやら認識票を取られたようだ。

「……軍人、しかないだろうな……?」

そもそも一般人の人間に認識票など必要ない。不幸にして戦死した場合の個人判別に使われるものだ。戦争を思い出させるからそんなものは見たくもないという一般人も多数いる。

だがこれは常に身に付けているもの。ユリアももちろん、この城の中やリベール中の兵士たちは退役するまで身に付けられていることを義務付けられていた。それゆえ、認識票を取られるということは自分の懐をまさぐられて何一つ気付かなかったという情けない事態を表していた。他国の兵ながら同じ軍人として一体どういうことなのかと問い詰めた気分になつてきた。

「一体全体誰なのだ、そんな間抜けな盗難にあったのは……」  
メモを見直し盛大に机へ頭を打ちつけた。その勢いは隣の部屋で仕事をしていた親衛隊士が心配して声をかけるほど。

それもそのはず、メモに記された名は間違いでなければ、オリヴァルト皇子専属護衛、ミユラー・ヴァンダーだったのだから。